

令和元年度病害虫発生予報第8号

令和元年9月11日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	—	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	—	やや多い
		黒星病	—	平年並
		クワコナカイガラムシ	平年並	平年並
		シンクイムシ類	—	平年並
		ハダニ類	—	平年並
果樹	カキ	炭疽病	やや早い	平年並
	ブドウ	べと病	—	やや少ない
		チャノキイロアザミウマ	—	平年並
		ハマキムシ類	平年並	平年並
共通 (ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ)	カメムシ類	—	やや多い	
野菜	ネギ	黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	—	平年並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	やや少ない
	ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並
		ナガイモコガ	—	やや少ない
		ハダニ類	—	平年並
	キャベツ、 ブロッコリー	べと病	平年並	平年並
黒腐病		平年並	平年並	
軟腐病		平年並	平年並	
黒すす病		平年並	平年並	
アブラムシ類		平年並	平年並	
コナガ		平年並	平年並	
キャベツ、ブロッコリー、 イチゴ	ヨトウムシ	平年並	平年並	
	ハスモンヨトウ	—	平年並	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（9月7日～10月6日：9月5日、広島地方気象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、期間のはじめは平年に比べて晴れの日が少なく、その後は平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

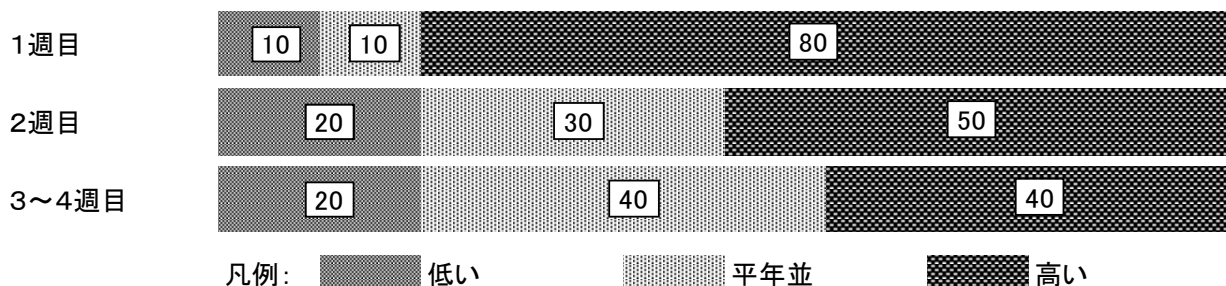
向こう1か月の平均気温は高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[ダイズ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月6日現在、フェロモントラップによる誘殺数は平年並～やや少ない。

イ 9月6日現在、巡回調査定点のダイズほ場における発生は平年よりやや少ない。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ジアミド系殺虫剤を散布する。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、白変葉の確認にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内でも観察を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における新梢葉の発病葉率は平年に比べてやや高い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液などを散布する。特に、現在、新梢葉の発病が多い園では、収穫後の薬剤散布を徹底し、病原菌の感染を防ぐ。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を実施する。

イ 薬剤は収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液又はポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

ウ 多発園では10～11月に2～3回の薬剤散布を行う。薬剤は、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、オキシラン水和剤600倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液、オルフィンフロアブル4,000倍液などを使用する。

エ 異なる品種の混植園などで薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数、散布回数など）に注意する。

オ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。

イ 第1世代ふ化幼虫の発生盛期は平年並の7月8日（平年：7月8日）であったことから、第2世代の幼虫ふ化時期は、平年並の8月下旬～9月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期に本種の発生が認められる園では、越冬量が増加し、翌年に多発する可

能性が高いことから、収穫後の防除を徹底する。

イ 多発園では、収穫終了後にダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを散布する。

4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県内9か所に設置したフェロモントラップによるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、一部の地点でやや多いものの、全般的には平年並である。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）におけるシンクイムシ類の果実被害は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、シンクイムシ類の発生盛期であるため、晩生品種（新高、新興、王秋など）では防除を徹底する。特に、二十世紀などの中生品種で被害が多かったナシ園では、果実被害が懸念される。

イ 薬剤は、シペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2,000倍液又はイカズチWDG1,500倍液）、テルスターフロアブル3,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、フェニックスフロアブル4,000倍液などを散布する。

5 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるハダニ類の10葉当たりの寄生個体数は0.5頭（平年：1.0頭）と平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生密度が高い園では、越冬密度を低減させるため、秋期の対策（薬剤散布、紙バンド巻きなど）を徹底する。

[カ キ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、一部の現地ほ場で果実被害が認められている。

イ 昨年の発生量は平年並であり、越冬菌密度も平年並と予想される。

ウ 6月の降水量は平年並であり、新梢における発生量も平年並と予想される。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 9月にストライド顆粒水和剤3,000倍液、ナリアWDG2,000倍液などを散布する。

- イ 長雨で散布間隔が長くなると発病が増加するため、定期防除を徹底し、降雨前の防除を心がける。
- ウ 発病が認められた新梢や果実は直ちに切除して、園外に持ち出し処分する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予察の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における発病は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を1～2回行う。

イ 薬剤は、収穫終了後にムッシュボルドーDFの500倍液などを散布する。
なお、無加温ハウス栽培でのビニール除去後及び露地栽培では、散布時に固着性展着剤を加用する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場に設置した黄色粘着板による捕獲数は、平年並である。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本種による果実被害は平年並の発生量となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では、収穫終了後にコテツフロアブル3,000倍液などを散布する。

イ 9月に発生量が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場に設置したフェロモントラップによる誘殺数は、平年並となっている。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）における本種被害は平年並の発生量である。

ウ 向こう1か月の気象予報とこれまでの発生経過から、次世代成虫の発生量は平年並で、発生ピークは平年並の9月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近年、秋期の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。秋期の発生は越冬密度を高め、翌年春の発生量の増加を招くため、収穫後であ

っても注意してほ場を観察する。

イ 多発園では、収穫終了後にフェニックスフロアブル4，000倍液、サイアノックス水和剤1，000倍液などを追加散布する。

[共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ）]

1 カメムシ類（令和元年7月11日付けで病害虫発生予察注意報第1号を発表）

（1）予報の内容

発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、県内4か所に設置した予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数は、平年に比べてやや多い。

イ 8月下旬現在、一部地域のナシ園において、カメムシ類の飛来が確認された。

ウ 向こう1か月の気象予報から、今後もカメムシ類の加害活動にやや好適な条件が続くと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

イ 防除のタイミングは、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

ウ 薬剤は樹種ごとに県防除指針や防除暦を参考とする。

エ 樹種によっては収穫期となっているため、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

[ネギ]

1 黒斑病

（1）予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足によって発病が助長されるので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルなど）600倍液、ポリベリン水和剤1，500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1，000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3，000倍液などを散布する。

2 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ベストガード粒剤6kg/10a株元処理、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500~5,000倍液などを散布する。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、ウララDF1,000~2,000液倍、ハチハチ乳剤1,000液、ディアナSC2,500~5,000倍液、ベネビアOD2,000倍液などを7~10日間隔で散布する。

イ 土寄せ時は、ベストガード粒剤6kg/10a株元処理、ダントツ粒剤3~6kg/10株元処理などを行う。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は、平年と比べてやや少ない。

イ 8月下旬現在、現地調査ほ場において発生は確認していない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ ネギの薬剤は、トルネードエースDF1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液などを散布する。

ウ ナガイモの薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生時期、発生量は平年

並である。

イ 向こう1か月の気象予報から発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

ウ 大雨や台風の直後には、天候回復後にできるだけ早く薬剤散布する。

エ 薬剤は、ダコニール1000の1, 000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液、アミスター20フロアブル2, 000倍液などを散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は、平年と比べてやや少ない。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、アタブロン乳剤2, 000倍液、トレボン乳剤1, 000倍液、モスピラン顆粒水溶剤4, 000倍液、プレバソンフロアブル5の2, 000倍液などを7～10日間隔で2回程度散布する。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハダニ類を対象にコロマイト乳剤1, 000倍液など、カンザワハダニを対象にコテツフロアブル2, 000倍液を葉裏にも付着するように丁寧に散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 べと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場（ブロッコリー）において、本病の発生は確認していない。

イ 本病は気温が比較的低温、降雨が多いと発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの薬剤は、ヨネポン水和剤500倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブフロアブルなど）400～600倍液、リドミルゴ

ールドMZ 1, 000倍液、フォリオゴールド800～1, 000倍、シグナムWDG 1, 500～2, 000倍液、レーバスフロアブル2, 000倍液などを予防散布する。

イ ブロッコリーの薬剤は、フォリオゴールド1, 000倍液、レーバスフロアブル2, 000倍液、シグナムWDG 1, 500倍液などを予防散布する。なお、フォリオゴールドは花蕾形成前までに散布する。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場（キャベツ）において本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。

イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないよう注意する。

ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つことができるだけ早く薬剤散布する。

エ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1, 000倍液、ドキリンフロアブル500～1, 000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

オ ブロッコリーの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1, 000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は確認していない。

イ 本病は、気温が高く、降雨が多いと発生が多くなる。また、台風に伴う風雨によっても発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。

イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つことができるだけ早く薬剤を散布する。

ウ キャベツの薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅パーシン水和剤）1, 000倍液、ドキリンフロアブル800～1, 000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

エ ブロッコリーの薬剤は、ナレート水和剤1, 000倍液、Zボルドー500倍液、クプロシールドの1, 000～1, 500倍液などを散布する。

4 黒すす病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は確認していない。

イ 現地の一部では、育苗段階で本病の発生が確認されている。

ウ 本病は、気温25℃付近が発病適温であり、多湿条件下で発生が多くなる。

また、降雨と強風により発生が多くなるため、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つことができるだけ早く薬剤散布する。

イ ブロココリーの薬剤は、シグナムWDG1,500倍液、アフェットフロアブル2,000倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、パレード20フロアブル2,000倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本圃での発生時には、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液、ランネート45DF1,000～2,000倍液、ウララDF2,000～3,000倍液などを散布する。

6 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は、平年と比べてやや少ない。

イ 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の育苗期後半～定植当日には、プレバソフロアブル5の100倍液、ジュリボフロアブル200倍液、ベリマークSC400倍液などをセルトレイ灌注する。また、定植前日～定植時には、キックオフ顆粒水和剤100倍液をセルトレイ灌注する。

イ 本圃での発生時には、トルネードエースDF2,000倍液、ディアナSC

2, 500～5, 000倍液、アニキ乳剤1, 000～2, 000倍液などを散布する。

7 ヨトウムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツの薬剤は、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、トルネードエースDF2, 000倍液、ファルコンフロアブル2, 000～4, 000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの薬剤は、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、マトリックフロアブル1, 000～2, 000倍液、ランネート45DF1, 000倍液、ファルコンフロアブル4, 000倍液などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）に設置したフェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場（キャベツ、ブロッコリー）における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ キャベツでは、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、アニキ乳剤1, 000～2, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液、トルネードエースDF2, 000倍液、マトリックフロアブル2, 000倍液、ファルコンフロアブル2, 000～4, 000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーでは、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、アニキ乳剤1, 000～2, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液、ファルコンフロアブル4, 000倍液などを散布する。

エ イチゴでは、マッチ乳剤3, 000倍液、フェニックス顆粒水和剤2, 000～4, 000倍液、トルネードエースDF2, 000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病虫害防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第9号の発表は、10月2日（水）の予定です。
なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。